



近衛殿飭剣 (このえどのかざだち)



玉里文庫・天の部108番知新箱1931

五摂家筆頭である近衛家当主が朝廷における儀式の際に用いた飭剣は、「かざだち」と略称されていた。玉里文庫に伝わる近衛殿飭剣の図は写本一卷全五紙、近衛家以外の貴族から借り出した近衛家飭剣の図を写し取り、近衛家側に確認を依頼、指摘を受けた相違箇所について注記してある。また広橋家に伝わる飭太刀との比較結果も記載してある。図版は、近衛殿飭剣の図全五紙中第一紙の部分である。近衛家飭剣の図が作成された経緯や写し取られた近衛家飭剣の図を近衛家・広橋家の飭剣と比較した結果が注記されている。



近衛家柏夾 (このえけかしわばさみ)



玉里文庫・天の部108番知新箱1930

近衛家当主等が朝廷における儀式の際に使用した冠を描いているものが、近衛家柏夾である。近衛家柏夾は写本一卷全五紙で、その内四紙に山科家・近衛家・高倉家の冠等が描かれている。図版は近衛家柏夾第二紙目で、近衛家当主が使用した冠が彩色付きで描かれている。伊勢貞丈が「外折而内巻」と記載していることが確認される。玉里文庫に伝わっている写本は、明和9年に伊勢平蔵貞丈が写し、その後享和3年伊勢貞春が所蔵していた蔵本を有馬伴左衛門純応が写したものである。



装束織文図会 (しょうぞくしよくもんずえ)



玉里文庫・天の部92番849、同97番874

装束織文図会は、王家・貴族達が使用することを許された衣服の柄や色を示したもので、江戸後期松岡士弁（辰方）が著し、玉里文庫には刊本一冊四十六丁の大本として合わせて三冊が伝わっている。本書によれば、鶴が雲の中を飛ぶ「雲鶴」と雲が湧き出る状態を描いた「雲立涌」は親王（天皇の兄弟達・皇子達）と摂関（近衛・九条・鷹司・二条・一条家当主）に限られていた。王家関係者と同じ柄や色の衣服を用いることを許されていた近衛家当主が五摂家筆頭として貴族社会の最上位に位置していたことが分かる。



文永八年(1271)七月十六日

るす しゃみ くだしぶみ
留守沙弥某下文

志々目文書



島津荘留守職の沙弥某が、藤原（富山）清義を島津荘大隅方禰
寝院志々目村（鹿屋市獅子目町）の名主職に補任(ぶにん)した下文。
この名主職は、藤原義房（法名西意、清義の叔父）から馬入道道西
の子に譲られていたが、清義は、道西が領家たる興福寺一乗院にと
って「悪を成す」者であることなどを留守職に訴え、この下文を獲
得した。近衛家と一乗院が遠隔地の島津荘を維持する上での留守職
の役割がうかがえる文書である。



管窺愚考 (かんきぐこう)



玉里文庫・天の部5番仁61

別名『島津御荘考』。伊地知季安（薩摩藩の記録奉行、『旧記雑録』編者）がその在野期間中、島津荘の歴史を中心に、同荘関連の古代～近世史を叙述した書物。天保3年（1832）に草稿を書き始め、翌4年に脱稿した。上・中・下の3巻と、典拠史料を集めた附録1巻からなる。展示したのは、下巻において、藤原頼通から近衛経忠（1302～1352）に至るまでの島津荘「領家」（厳密には本家）13人の変遷をたどっている箇所冒頭部分。



近衛信輔公御歌 (このえのぶすけこうおんうた)



玉里文庫・天の部5番84

信尹（信輔）は薩摩に配流されていた約**3年**のうち**1年3ヶ月**を坊津の地で過ごした。この時期の実体験から詠まれたものが近江八景の坊津版である坊津八景の歌である。近江八景の「三井晩鐘(ばんしょう)」「唐崎夜雨(やう)」「栗津晴嵐(せいらん)」「比良暮雪(ぼせつ)」「矢橋帰帆(きはん)」「勢多（瀬田）夕照(せきしょう)」

「石山秋月(しゅうげつ)」「堅田落雁(らくがん)」に対し、坊津八景では「松山晩鐘」「深浦夜雨」「中島晴嵐」「鶴崎暮雪」「亀浦帰帆」「網代夕照」「御崎秋月」「田代落雁」が配されている。



三国名勝図会 (さんごくめいしょうずえ)



玉里文庫・天の部69番618

『三国名勝図会』は全**60**巻**60**冊。書名の「三国」とは薩摩藩の所領であった「薩摩」「大隅」「日向」を指す。その巻数からも窺えるように、本書はまさに薩摩藩の地誌・名所図会の集大成ともいうべき存在である。本書は江戸時代には遂に出版するには至らず、明治**38**年（**1905**）に和装本**60**巻**20**冊本として初めて刊行された。図は「坊津八景」のうち、「御寄秋月」と「田代落鴈」（巻**26**）。近衛信尹の坊津八景の歌に合わせて坊津の情景を描いている。



薩藩名勝志 (さつぱんめいしょうし)



玉里文庫・天の部42番523

坊津に配流された近衛信尹の住居として与えられたのは従一位前左大臣の住まう家としてはあまりにも粗末なものであった。一行は言葉もなく、皆口惜しさに涙を流したという。『薩藩名勝志』巻6の坊津港の絵に描かれている「近衛屋舗(このえやしき)」がそれである。

『薩藩名勝志』は全**19**巻。薩摩藩最初の名所図会である。編者は本田親孚(ちかざね)・平山武毅。文化**3**年(1806)序を有する



阿蘇墨齋玄与近衛信輔公供奉上京日記

(あそぼくさいげんよこのえのぶすけこうぐぶじょうきょうにつき)



玉里文庫・天の部5番68

坊津へと配流となっていた近衛信輔(のぶすけ) (信尹(のぶただ))
が、文禄5年(1596)に許され、京へと上る際に同行した阿蘇玄
与(げんよ)の日記である。阿蘇玄与惟賢(これかた)は島津氏に仕えた
武将・歌人。一行は大隅半島を廻り、志布志・細島(日向国)・
豊後・瀬戸内海を海路にて帰京した。

この近衛信輔の薩摩配流の後、島津家と近衛家の関係はより密
接になっていくことから、転換点を迎えた両家の様相を捉えた一
級の資料といえる。



三国名勝図会 (さんごくめいしょうずえ)

玉里文庫・天の部69番618



近衛桜は原良村の島津久誠(ひさもと)の別墅(べっしょ)にあり、京都の近衛屋敷の庭に植えられているものと同じ垂糸桜(いとざくら)である。かつては天を覆うほどの大樹で、多くの枝が地に垂れ、春毎に見事な花を咲かせていたが、近年になって枯れてしまったので、その跡地に再び同種の桜を植えたという。花見を楽しむ老若男女の姿とともに描かれているこの桜は枯死する前の近衛桜の姿であろうか。鹿児島島の近衛桜と信尹との関係は不明であるが、近衛桜の盛名が遠く鹿児島島の地にも鳴り響いていたことは確実である。



宝生流謡本 (ほうしょうりゅううたいぼん)



玉里文庫・天の部35番493

京都の近衛屋敷の枝垂桜(しだれざくら)は「近衛殿の糸桜」の名で知られ、洛中屈指の名花であった。謡曲「西行桜」にも、シテである老木の桜の精が京の桜名所尽くしを西行らに語る場面において「しかるに花の名高きは、先(まつ)初花をいそぐなる、近衛殿の糸桜」とまず第一にこの桜を挙げているほどである。

図版の謡本は**10巻10冊**。宝生流の謡本としては初めての刊本で、十四世宝生大夫英勝が校正を加えたもの。



現在の近衛桜



この桜の写真は京都にあった近衛屋敷跡の枝垂桜（京都御苑(ぎょえん)。平成**25**年**3**月**23**日、京都女子大学教授・坂本信道(のぶゆき)氏撮影)である。枝垂桜の大木が約**30**本植わっているが、謡曲「西行桜」に「まづ初花を急ぐなる近衛殿の糸桜」と謡われているように、京都では一番早く咲き始める桜としても知られており、今なお大勢の花見の人々で賑わっている。



京都古地図で見る 近衛殿(近衛屋敷)



安永年間（1772～1781）の京都古地図（個人蔵）。地図中央やや右に禁裏があり、そのすぐ上（北）に近衛殿が見える。謡曲「西行桜」に「近衛殿の糸桜」と謡われている近衛殿とはこの屋敷のことである。





源氏物語 (げんじものがたり)



玉里文庫・天の部217番1371

『源氏物語』の室町末期頃の写本。本書は近衛家より天皇家への嫁入り本として伝わり、その後、近衛忠熙(ただひろ) (1808-1898) に嫁いだ島津斉興(なりおき) (1791-1859) の養女郁姫(いくひめ) (1807-1850) に譲られ、さらに玉里島津家へと受け継がれたものである。島津家と近衛家の姻戚関係を象徴するものといえるだろう。展示している黒塗蒔絵内箱の「源氏物語」の文字は近衛基熙(もとひろ) (1648-1722) の筆蹟と伝えられる。54巻54冊。



古筆源氏物語 (こひつげんじものがたり)



玉里文庫・天の部213番1361

数ある『源氏物語』の中でも最も古い写本の一つで、一部が鎌倉時代までさかのぼることのできる室町時代初期の写本である。本書は『源氏物語』五十四帖のうち十五帖が残されており、十五帖を写した人物も古筆鑑定書（極書・極札）によって明らかになっている。当時の一流の天皇・公家・僧侶たち九名によって写されたこの十五帖が薩摩の玉里島津家へ残されていたことは、近衛家と島津家との深い繋がりをしめす証左のひとつといえるだろう。



西藩野史 (せいはんやし)



玉里文庫・地の部4 番2047

『西藩野史』は宝暦8年（1758）に得能通昭が著した島津氏の編年史である。本書によれば、島津吉貴(よしたか)（第4代藩主）は元禄2年6月に妹の亀姫を近衛家久（23代当主）に嫁がせたが、同年10月5日に亀姫は16歳で病死してしまう。そこで翌年吉貴は娘の満君（当時7歳）を家久に嫁がせる約束をし、正徳2年

（1712）12月に満君は家久の継室となった。しかし、その満君も3年後の正徳5年11月に痘瘡により17歳で逝去し、島津氏と近衛家の最初の婚姻は不幸な結果に終わった。



御屋地君略伝 (おやちきみりやくでん)



玉里文庫・天の部5番礼161

『御屋地君略伝』1冊は島津義弘の長女で豊州家6代目当主島津朝久(ともひさ)の夫人であった御屋地君とその子孫についての伝記である。元禄年間に日向国の製凶を巡って伊東氏との間で起こった騒動の解決に活躍した帯刀仲休(御屋地君の曾孫)が、藩主綱貴の命により事件の顛末を島津荘本家たる近衛家に説明したことがきっかけとなって、長らく断絶していた島津氏と近衛家との間で親睦を深めようという機運が生まれ、遂には島津氏の亀姫と満君が相次いで近衛家久に嫁ぐに至ったと述べる。



御上京御道中并御在京記

(ごじょうきょうごどうちゅうならびにございきょうき)



玉里文庫・番外の部5016

宝暦**10**年（**1760**）**3**月、第**8**代藩主島津重豪は京都に向けて江戸を旅立つ。

本書は、**3**月**5**日江戸発駕以来**22**日京都到着までの東海道各宿駅での詳細と、同**4**月**7**日京都発駕以来**23**日江戸到着までの復路各宿駅での詳細を記した「御上京御往来御道中記」、**3**月**22**日の京都到着以来**4**月**7**日の発駕までの京都滞在期間中、**27**日の参内をはじめとして諸所の巡見の次第を記した「宝暦十辰年京都御着より御在京中并御発駕迄之一巻」、「御先御用之御聞番中村帯刀江相渡、御所司代井上河内守様江被差出候御書付并御用人江申談候書付」の**3**つの内容から構成されている。



御垣の下草 (みかきのしたくさ)



玉里文庫・人の部79番箱3456

明治**21**年（**1888**）刊の税所(さいしょ)敦子（**1825 1900**）の歌集。高崎正風序。敦子は京都生まれ。和歌を千種有功(ちぐさありこと)に学び、大田垣蓮月、高畠式部らの女流歌人と交流をもつ。**20**歳で薩摩藩士の税所龍右衛門篤之（?-**1852**）と結婚。長女を出産した後、**28**歳の嘉永**5**年（**1852**）、夫と死別し、翌年鹿児島に下る。その後、島津斉彬の世子哲丸の養育係として出仕。斉彬、哲丸没後の文久**3**年（**1863**）には近衛忠房に嫁ぐ貞姫（斉彬養女）に従って上京、幕末維新の動乱期の近衛家を支えた。明治**6**年（**1873**）、貞姫（光蘭院）とともに東京へ移り、明治**8**年には権掌侍として後宮を支えた。



近衛基前和歌短冊 (このえもとさきわかたんざく)



木脇家文書

近衛基前は江戸時代後期の近衛家当主（1783 1820）。号は証常楽院。薩摩藩士木脇啓四郎(きのわきけいしろう)は、絵画の師である税所龍右衛門（諱は篤之(あつゆき)、画名は文豹(ぶんびょう)）が屋敷番をしていた縁で、近衛家の桜木町（鴨川の東、丸太町川端）をしばしば訪れた。龍右衛門の妻の敦子に和歌を詠んでもらい、鹿児島で茶道の教授をしたことのある貞姫（近衛忠房室）からは、御殿にあがって「段々有がたき御品」を賜った。この基前の短冊もそうした下賜品の一枚であろう。「しろたへになひく光も玉川の／波かけけりな里のうのはな 基前」



こころ
心つくし

木脇家文書



税所敦子が夫である税所龍右衛門に先立たれ、嘉永6年(1853)4月から6月にかけて、一人娘の徳子を連れて鹿児島に下ったときの歌日記。識語によると、明治11年(1878)1月15日に、税所龍右衛門(画号、文豹(ぶんびょう))の弟子であり、敦子とも親交があった薩摩藩士木脇啓四郎(きのわきけいしろう)祐尚(1817 1899)が、義弟の木脇祐治の依頼によって模写したものである。夫との死別、薩摩藩邸への引き移り、その後判明した懐妊の事実、誕生した男子の死など繰り返し訪れる苦難の連続に絶望の淵に立たされつつ、見知らぬ土地へ旅を描く。